

看護専門学校における社会人学生を含むグループと 現役生のグループ学習の特徴（第一報）

小此木 百合香

元 目白大学 看護学部看護学科

Characteristics of Group Learning of a Group including Adult Students at a Nursing Vocational School and of a Current Student Group: First Report

Okonogi Yurika

ex-Department of Nursing, Faculty of Nursing, Mejiro University

Abstract : [Aim] This investigation will clarify the characteristics of group learning from statements made by a group that included adult students and a group of current students.

[Method] I carried out quantitative and descriptive analyses of statements that were made by the group that included adult students and the group of current students after their usual seminar on lifestyle support skills, which were based on the participation-through-observation method (non-participative type).

[Results] A characteristic of group learning is that the students discussed between themselves what they had picked up during the seminar and shared what they had learned. The students recalled their acquired knowledge, became aware of the skills in which they were inexperienced while practicing, and reviewed the learning methods and content that they had learned thus far. Because the adult students were aware of the difficulties involved in working and the importance of maintaining mental and physical health, in the group learning of the group that included adult students, advice was often given from personal experience.

[Conclusion] In order to make group learning more effective, it is necessary to encourage adult students, who come from diverse backgrounds, to share their experiences, in accordance with the content being learned.

Key Words : Adult students, Group learning

抄録 : [目的] 社会人学生を含むグループと現役生グループの発言内容からグループ学習の特徴を明らかにする。[方法] 参加観察法（非参加型）による日常生活援助技術演習後の社会人学生を含むグループと現役生グループのグループ学習中の発言内容を質的記述的に分析した。[結果] グループ学習の特徴として、学生は演習体験での気づきをメンバー間で語り合い、学びを共有していた。学生は既習の知識を想起し、実践しながら未熟な技術を実感し、これまでの学習方法・内容の見直しをしていた。社会人学生を含むグループのグループ学習では、就業することの厳しさや心身の健康維持の重要性を認識していたことから、社会人経験を活用した助言が行われていた。[結論] グループ学習の効果を高めるために学習内容に即した多様な背景を持つ社会人学生の経験を引き出すような関わりが必要である。

キーワード : 社会人学生、グループ学習

1. はじめに

現在の若者（15～39歳）は、長引く厳しい経済雇用情勢による影響で不本意な非正規雇用比率が増加する社会の中で生きているが、能力・個性の発揮を求めて長期雇用のもとでのキャリア形成を志向している（平成25年版厚生労働白書）。これらの社会背景を反映して、就職につながる資格取得や即戦力になる教育を求め、学歴・年齢・就業経験等が異なる社会人経験者が看護専門学校へ入学する例が増加している。看護師等学校入学状況（2016年度総務省統計局）によると、入学者に対する20歳以上の者の占める割合が全国平均で21.8%となり、現役生とは異なる背景を持つ学生が増加していると報告されている。

看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（厚生労働省，2011）では、看護師教育の課題として、社会人学生が増加し、学習状況や生活体験など様々な面で学生間の差が広がっているため、個々の学生のレディネスに合わせた教育を行うことが難しくなっていることを挙げている。これらの背景をふまえ、多様化する入学生の学習者としての特徴（西谷，2003）（西田他，2003）や教授・学習方法を探求する研究（渡邊他，2014）が行われている。看護教員の社会人学生に対する認識は、資格取得への意識が高く、主体的な学習姿勢を持ち、社会性を発揮する行動を評価する反面、グループ活動で指導的な態度や批判的な態度をとることがあり、柔軟な学習態度の不足という課題が報告（渡邊他，2013）されている。しかし、社会人学生の学習活動に関する研究は少なく、学習活動の実態は明らかではない。

授業形態のひとつである演習には討議を取り入れた学習方法があり、グループ学習などが含まれる。学生はグループメンバー間の協力的な学習活動を通して、講義のみの授業展開のときには得られない重要な学びをすることができる（広瀬，2001）。先行研究では、看護系大学におけるPBLチュートリアル教育の学習成果を明らかにした研究やグループ学習の効果（松田他，2012）を明らかにした研究がみられる。しかし、最近の学生の傾向として、自己主張のできる学生の意見を聞いているという傾向になりやすく、討議が現象的に活発に進展しているようにみえても安心できない。意見を出す学生は決まって

しまい、他の学生は聞き役にまわり、それぞれの考えを発展させる機会を持たぬまま終わることも多い（杉森他，2014）。学生は自分の意見を言うことやメンバーと協調して進めるグループ学習に戸惑いや困難を感じているという報告（藤野，2005）もある。学生の多くは、異なる意見を交換することに苦手意識があり、できるだけ表面的には穏便な人間関係を構築しようとする傾向があるという報告（芳我他，2007）もあり、現役生とは異なる背景を持つ社会人学生が増加している看護専門学校でのグループ学習活動において、どのような変化が生じているのか、明らかにする必要がある。

2. 研究目的

グループ学習中の発言内容を分析し、社会人学生を含むグループと現役生グループのグループ学習の特徴を明らかにする。

3. 用語の定義

(1) 現役生

高校卒業後、即入学した者。

(2) 社会人学生

高校あるいは短大・大学等を卒業後、なんらかの就業経験を持ち、入学した者。

4. 研究方法

(1) 研究デザイン

質的記述的研究

(2) 対象

看護専門学校（全日制3年課程）3校の1年生、社会人学生（3名）を含むグループと現役生グループ、各3グループ、計6グループとした。

(3) データ収集内容

- (a) グループ学習目標
- (b) 現役生および社会人学生数
- (c) 社会人学生の背景

性別・年齢、これまでの就学状況、就業経験、看護専門学校への入学動機

(4) データ収集方法

平成26年5月21日から7月23日の3校のグループ学習時間に参加観察法（非参加型）にてグループ学習での発言内容をICレコーダーに録音した。

(5) 発言内容の分析方法

- (a) 社会人学生を含むグループと現役生グループごとにICレコーダーに録音された発言内容から逐語録を作成し、意味内容を損なわないように1記録単位とした。
- (b) 逐語録を精読し、授業担当教員の設定したグループ学習の目標に沿った発言内容を抽出した。
- (c) 抽出した発言内容は意味内容を損なわないようにコード化した。コードの意味内容の類似性に基づいて分類し、コードより抽象度が高くなるように命名し、サブカテゴリ化した。さらに、サブカテゴリの意味内容の類似性に基づいて分類し、カテゴリ化した。
- (d) データ分析過程において、看護教育実践者からスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

本研究計画は獨協医科大学看護学研究倫理委員会の審査の承認（承認番号：看護25013）を得た。実施に当たっては研究協力校および研究協力者に口頭と文書で説明し、同意を得た。

6. 結果

(1) グループ学習目標（3校に共通）

- ①看護師・患者役体験を振り返り、気づいたことを述べる。
- ②意見交換をふまえ、自己の課題を明確にする。

(2) 現役生および社会人学生数

現役生32名、社会人学生9名、合計41名。

(3) 社会人学生の背景

3校に共通して介護経験のある社会人学生が含まれていた。

- (a) 性別は女性7名、男性2名であった。年齢は24歳3名、26歳1名、27歳1名、30歳2名、32歳1名、37歳1名であった。
- (b) 就学状況は、高卒5名、4年制大学卒3名、看護以外の専門学校卒1名であった。
- (c) 就業状況は複数にわたり、事務（1年未満、3～5年未満）、営業（1～3年未満、3～5年未満）、接客・飲食物給仕従事（1年未満、1～3年未満、3～5年未満）、理・美容（1年未満）、

製造業（1年未満、5～10年未満）、販売店員（1年未満、1～3年未満、5～10年未満）、介護（1年未満、1～3年未満、10年以上）、生活相談員（1～3年未満）、看護助手（1年未満）であった。

(d) 看護専門学校への入学動機（自由記載）

「介護の仕事をしているなかで、障害者の方と関わりが多く、ヘルパーの資格だけでは無力だなと感じ、ステップアップしたかった。」

「将来の暮らしに不安があったため。一人っ子なので親が老年になったとき、今の仕事では養えないと思ったから。」

「介護とは違った視点から、自分のできることの幅を広げたい。」

(3) グループ学習目標に沿った発言内容

グループ学習目標に沿った発言内容は275記録単位であった。これらの発言内容を意味内容を損なわないようにコード化し、分析を行った。その結果、社会人学生を含むグループは、125コード、34サブカテゴリ、11カテゴリ、現役生グループは、150コード、30サブカテゴリ、9カテゴリが抽出された。以下、コードを〔 〕、サブカテゴリを〈 〉、カテゴリを【 】で表す。

(4) 社会人学生を含むグループと現役生グループに共通して抽出されたカテゴリ

社会人学生を含むグループと現役生グループに共通して抽出されたのは、【看護師役体験を通して気づいた看護技術の不足】【看護師役体験を通して実際の患者へのケアを提供する責任の自覚】【患者役体験を通して気づいた援助を受ける患者の気兼ねや苦痛】【患者役体験を通して気づいた看護師への思い】【看護師役・患者役体験で気づいたケアに対する学びの共有】【看護師役・患者役体験を通して気づいた患者心理をふまえた援助の必要性】【体験学習における看護師役割・患者役割の見直し】【看護師役・患者役体験で統合された知識と技術】【学習課題の気づき】の9カテゴリであった。

①【看護師役体験を通して気づいた看護技術の不足】

このカテゴリは、〈手技の難しさを実感〉〈手技への戸惑い〉〈一連の動作への戸惑い〉〈一連の動作の振り返りを通して技術の未熟さに気づく〉から抽出された。このうち、〈手技の難しさを実感〉は〔手技

のやりづらさ] [患者を動かすためには力を入れないといけない] から構成されていた。

②【看護師役体験を通して実際の患者へのケアを提供する責任の自覚】

このカテゴリは、〈患者を具体的にイメージしたことでのケアへの不安〉〈患者の心情を考慮した援助の必要性〉〈患者の個人特性をふまえた援助を行う必要性〉〈コミュニケーションの重要性の再認識〉〈対象を尊重した援助の重要性〉から抽出された。このうち、〈患者を具体的にイメージしたことでのケアへの不安〉は [実際の患者ケアへの不安] から構成されていた。

③【患者役体験を通して気づいた援助を受ける患者の気兼ねや苦痛】

このカテゴリは、〈援助を受けなければならない患者の緊張感〉〈援助を受けなければならない患者の気兼ね〉〈援助を受けなければならない患者の我慢〉〈援助を受けなければならない患者が抱く不快感〉〈援助を受けなければならない患者が抱く不安〉〈援助を受けなければならない患者が抱く羞恥心〉〈援助を受けなければならない患者が抱くもどかしさ〉〈援助を受けなければならない患者が抱く嫌悪感〉〈援助を受けなければならない患者が抱く自尊感情の喪失〉から抽出された。このうち、〈援助を受けなければならない患者が抱く自尊感情の喪失〉は [あきらめ] [あきらめと失望] などから構成されていた。

④【患者役体験を通して気づいた看護師への思い】

このカテゴリは、〈援助を受けなければならない患者が抱く看護師への不要な心情〉〈援助を受けなければならない患者の心情を理解〉〈援助を受けなければならない患者の心情に対する変化〉〈看護師役に対する不信感〉〈看護師役に対する嫌悪感〉から抽出された。このうち、〈援助を受けなければならない患者の心情を理解〉は [患者の心情に寄り添う] [負いをもつ患者の行動] などから構成されていた。

⑤【看護師役・患者役体験で気づいたケアに対する学びの共有】

このカテゴリは、〈他者とは異なる気づき〉〈果たせなかった患者役割〉〈体験で得られた情報の提供〉から抽出された。このうち、〈他者とは異なる気づき〉は [患者役体験での不安の否定] [自尊感情の低下を防ぐ必要性とのギャップ] から構成されていた。

た。また、〈体験で得られた情報の提供〉は [苦痛体験] [不安感の軽減につながる声かけ] などから構成されていた。

⑥【看護師役・患者役体験を通して気づいた患者心理をふまえた援助の必要性】

このカテゴリは、〈遠慮や気兼ねを考慮した援助〉〈羞恥心の軽減〉〈不安の軽減〉〈負担の軽減〉〈家族を含めた援助方法の提案〉〈自尊感情を低下させない援助方法の提案〉〈援助を受けなければならない患者の心情を考慮した援助内容〉〈患者・看護師関係〉〈患者の立場に立った援助方法の提案〉から抽出された。このうち、〈患者・看護師関係〉は [信頼関係構築の重要性] [適切な技術があつてこそその信頼関係] [患者・看護師双方の尊厳の維持] などから構成されていた。

⑦【体験学習における看護師役割・患者役割の見直し】

このカテゴリは、〈看護師役割の見直し〉〈患者役割の見直し〉から抽出された。このうち、〈看護師役割の見直し〉は [患者役体験を通して自己の看護師役の振り返り] [有効な患者役割行動] などから構成されていた。また、〈患者役割の見直し〉は [患者役割の重要性] などから構成されていた。

⑧【看護師役・患者役体験で統合された知識と技術】

このカテゴリは、〈知識と技術の統合〉から抽出され、[既習の知識の想起] [既習の知識を活用し実践] から構成されていた。

⑨【学習課題の気づき】

このカテゴリは、〈学習態度の見直し〉〈学習方法の見直し〉〈学習内容の見直し〉から抽出された。このうち、〈学習内容の見直し〉は [学習目的の明確化] [前提を見直す] などから構成されていた。また、〈学習方法の見直し〉は [技術を身につけるために練習を積み重ねる] [練習を積み重ねるだけでなく振り返りの重要性] [練習効果を上げるために仲間を拡げる] [率直な意見提示の必要性] などから構成されていた。

(5) 社会人学生を含むグループのみに抽出されたカテゴリ

社会人学生を含むグループのみに抽出されたのは、【職業経験を活用した助言】【看護師になる自分の健康管理の必要性の認識】の2カテゴリであった。

①【職業経験を活用した助言】

このカテゴリは、〈介護経験をふまえた助言〉〈介護経験の振り返り〉から抽出された。〈介護経験をふまえた助言〉は、[実践で通用する技術を身につけるために行うべきことの助言] [練習方法を工夫する意義についての助言] [患者に合わせ基本技術を応用するために多くの患者役の協力が必要という助言] などから構成されていた。また、〈介護経験の振り返り〉は、[改めて看護の対象は人間である] [患者を尊重した援助を行うことを再認識] などから構成されていた。

②【看護師になる自分の健康管理の必要性の認識】

このカテゴリは、〈看護師になる自分をイメージした健康観〉から抽出され、[自身の健康維持を考慮した援助方法の必要性] [自身の健康維持と看護業務継続との関連] などから構成されていた。

7. 考察

(1) グループ学習の特徴

グループ学習目標に沿った発言内容を分析した結果、社会人学生を含むグループと現役生グループに共通して9カテゴリが抽出された。本研究は入学間もない1年次の学生を対象にデータ収集しており、体験学習を取り入れた教育の特徴から、【看護師役体験を通して気づいた看護技術の不足】【看護師役体験を通して実際の患者へのケアを提供する責任の自覚】が抽出されたと考えられる。さらに、学生は患者役割を通して、援助を受ける患者の気兼ねや苦痛を感じたことで、【患者役体験を通して気づいた援助を受ける患者の気兼ねや苦痛】が抽出されたと考えられる。学生は看護師役がスムーズにできるようにと不要な気遣いをしていたことに気づいたことで、患者役割の重要性を認識した。また、未熟な技術を提供する看護師役に対して、不信感を抱いたことから、【患者役体験を通して気づいた看護師への思い】が抽出されたと考えられる。学生はこれまでの看護師役・患者役体験での気づきをグループメンバー間で情報提供し合い、学びを共有したことにより、【看護師役・患者役体験で気づいたケアに対する学びの共有】が抽出されたと考えられる。また、患者役体験での気づきをふまえ、患者の心情を理解し、援助方法について考えたことで、【看護師役・患

者役体験を通して気づいた患者心理をふまえた援助の必要性】が抽出されたと考えられる。学生は演習体験を通して、既習の知識を想起し、実践に活用できたことから、【看護師役・患者役体験で統合された知識と技術】が抽出されたと考えられる。さらに、学生は未熟な技術を実感し、今後の演習における取り組み姿勢や学習方法・内容を見直したことから、【体験学習における看護師役割・患者役割の見直し】【学習課題の気づき】が抽出されたと考えられる。学生にとって、学内実習は看護技術を学習する上では不可欠のものであり、中でも学生がお互いに患者役・看護師役となって行う学内実習は臨場感をもたらし、体験により発展的に学習が深められる機会となる（厚生労働省，2003）ことから、上記の発言内容は、体験学習によって語られた特徴と考えられる。

社会人学生を含むグループのみに抽出されたのは2カテゴリであった。学士号を持つ看護学生は大学で学んできたことよりも、介護に従事していた経験が看護を学ぶ上で影響する（奥，2013）。本研究における社会人学生の就業経験も介護を含む対人サービスに従事していた者が含まれていたため、これまでの【職業経験を活用した助言】が抽出されたと考えられる。大卒の社会人学生は同級生との人間関係に対する不安、収入の消失、家庭生活と学業との両立など、様々な阻害要因に対処しながら、看護専門学校への入学を決断している（西谷，2003）。また、大卒者に限らず、社会人学生は看護師になるという明確な目的意識を持って入学しており（武森他，2007）、安定性を求め、看護師になることへの思い、将来への希望を持ち学業継続への対処を行う（迫田他，2014）特徴がある。本研究における社会人学生も介護に従事していた経験から看護をめざしたことや将来の暮らしに対する不安から、安定性を求めている。社会人学生は、これまでの就業経験から正規・非正規雇用にかかわらず、社会人としての責任や自覚を持ち、様々な人々と関わり就業することの厳しさも実感してきたことから、心身の健康維持の重要性を認識しており、【看護師になる自分の健康管理の必要性の認識】が抽出されたと考えられる。

以上のことから、グループ学習を通して、学生は看護師役体験を振り返り、看護技術の不足に気づ

き、実際の患者へのケアを提供する責任を自覚した。さらに、患者役体験を通して、患者の気兼ねや苦痛に気づき、援助を受けなければならない患者の心情を理解し、看護師の課題に気づいた。その結果、これらの学びを共有し、患者心理をふまえた援助の必要性について考えていた。また、グループ学習を通して、既習の知識を想起し、実践したことで、知識と技術の統合を図り、今後の学習課題について、気づきを得ていたことが明らかになった。

7. 結論

社会人学生は現役生とともにグループ学習をするなかで、職業経験を活用した助言をし、看護師になる自分の健康管理の必要性を認識していたことが明らかになった。一方、学生は自分の体験を語りながら、他者の意見を取り入れ、他者の意見を追体験しながら学んでいく(岩谷他, 2005)。今回のグループ学習においても、役割体験を話し合い、体験での気づきを共有することにより、今後の学習課題が明らかになり、相互に共有し合うグループ学習の効果が示唆された。グループ学習の効果を高めるために学習内容に即した多様な背景を持つ社会人学生の経験を引き出すような関わりが必要である。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

本研究は、2014年度獨協医科大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

なお、本研究は日本看護学教育学会第26回学術集会において発表した。

表1 社会人学生の背景

表2 社会人学生を含むグループの発言内容の特徴

表3 現役生グループの発言内容の特徴

表4 社会人学生を含むグループと現役生グループの発言内容の特徴(カテゴリ対比)

引用文献

- ・藤野ユリ子(2005)。看護学生がグループワークで感じる困難と満足との関係、日本看護学教育学会誌、15(1)、1-14。
- ・芳我ちより・舟島なをみ(2007)。学生間討議を中心としたグループ学習における教授活動の解明—看護基礎教

育において展開される授業に焦点をあてて—、看護教育学研究、16(1)、15-28。

- ・岩谷久美子・庄藤智恵美(2005)。グループ学習における学生の思考内容、日本看護学教育学会誌、15、84。
- ・厚生労働省(2013-9-10.)。平成25年版厚生労働白書—若者の意識を探る—。http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/。
- ・厚生労働省(2012-2-28.)。看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r985200001316y.html。
- ・厚生労働省(2003-3-17.)。看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書。http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html。
- ・松田麗子・牧野典子(2012)。保健学科成人看護学実習のグループ活動における共同的な学びの効果、中部大学教育研究、12、99-104。
- ・村本淳子(2001)。全体解説、広瀬信子、わかる授業をつくる看護教育技法2討議法を取り入れた学習法、17、医学書院、東京。
- ・村本淳子(2001)。グループ学習、高島尚美、わかる授業をつくる看護教育技法2討議法を取り入れた学習法、166、医学書院、東京。
- ・西田絵美・勝真久美子・上平悦子(2003)。看護専門学校に入学した大学卒業者の特徴—高校卒業者との比較を通して—、日本看護学会(看護教育)、34、112-114。
- ・西谷千恵(2003)。大卒社会人経験者が看護専修学校入学に至る経緯、日本看護学会(看護教育)、34、109-111。
- ・奥裕美(2013)。学士号をもつ看護学生が看護教育機関を選択した要因、聖路加看護学会誌、16(3)、28-37。
- ・迫田智子・梅田尚子・清水るみ子(2014)。社会人経験のある看護学生の就学上の困難と学業継続への対処、日本看護学会(看護総合)、44、321-324。
- ・杉森みどり・舟島なをみ(2014)。看護教育学(第5版増補版)、216、医学書院、東京。
- ・総務省(2013-11-14.)。看護師等学校入学状況及び卒業生就業状況2013年度。http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000000yy8n-att/2r9852000000yy8n.pdf。
- ・武井麻子(2002)。「グループ」という方法(第1版)、32、医学書院、東京。
- ・武森八智代・竹村多加・信里ユリエ・他3人(2007)。社会人経験を持つ学生の看護専門学校で学習することの意味、中国四国地区国立病院附属看護専門学校紀要、91-103。
- ・渡邊恵・鈴木玲子・常盤文枝(2014)。看護専門学校(3年課程)における社会人経験のある学生に対する教育方法の現状分析、日本看護学教育学会誌、25(1)、55-65。
- ・渡邊恵・鈴木玲子・常盤文枝(2013)看護教員が認識する社会人経験のある学生の学習者としての特徴と教育の困難感、日本看護学会(看護教育)、43、106-109。

受付日：2018年3月10日

受理日：2018年4月27日

表 1 社会人学生の背景

	性別	年齢	最終学歴	就業経験	年数	看護専門学校への入学動機
社1	女性	30歳代	高校	事務 営業 接客・飲食物 理容・美容	3～5年未満 3～5年未満 3～5年未満 1年未満	社会経験や結婚、出産を経て、日常で病院と関わる中で、看護の重要性に気づいたことです。
社2	女性	20歳代	4年制大学	介護	1～3年未満	介護の仕事をしている中で、障害者の方との関わりが多く、ヘルパーの資格だけでは無力だなと感じ、ステップアップしたかったので看護の道に進みました。
社3	女性	20歳代	高校	接客・飲食物	3～5年未満	看護師になるため。
社4	女性	30歳代	4年制大学	製造業 販売店員 営業	5～10年未満 1～3年未満 1～3年未満	大学で心理学を学んできました。この学校はカウンセラーが常にいてくれたりと学生の心理面にとっても気を使っていると感じました。実際は…。
社5	女性	30歳代	高校	事務 営業 販売店員 接客・飲食物 介護	1年未満 1～3年未満 1～3年未満 1年未満 1～3年未満	前職（介護）を辞めたかったので。
社6	女性	20歳代	高校	事務 製造業 販売店員 接客・飲食物	1年未満 1年未満 5～10年未満 1～3年未満	将来の暮らしに不安があったため。一人っ子なので、親が老年になった時、今の仕事では養えないと思ったから。
社7	男性	20歳代	4年制大学	販売店員 介護	1年未満 1～3年未満	介護をしていく上で、看護の仕事に興味を持ち、自分も看護業務を行いたいと思った。また、介護の給料では将来に不安を持っていたため。
社8	男性	20歳代	高校	介護 相談員 看護補助	3～5年未満 1～3年未満 1～3年未満	記入無。
社9	女性	30歳代	看護以外の専門	介護	10年以上	介護とは違った視点から、また自分のできることの幅を広げたいから。

表2 社会人学生を含むグループの発言内容の特徴

カテゴリ	サブカテゴリ
看護師役体験を通して気づいた看護技術の不足	手技の難しさを実感 手技への戸惑い
看護師役体験を通して実際の患者へのケアを提供する責任の自覚	患者を具体的にイメージしたことでのケアへの不安 患者の心情を考慮した援助の必要性 患者の個人特性をふまえた援助を行う必要性
患者役体験を通して気づいた援助を受ける患者の気兼ねや苦痛	援助を受けなければならない患者の気兼ね 援助を受けなければならない患者の我慢 援助を受けなければならない患者が抱く不快感 援助を受けなければならない患者が抱く焦りと不安 援助を受けなければならない患者が抱く羞恥心 援助を受けなければならない患者が抱く嫌悪感 援助を受けなければならない患者の自尊感情の喪失
患者役体験を通して気づいた看護師への思い	援助を受けなければならない患者が抱く看護師への不要な心情 援助を受けなければならない患者の心情を理解 看護師役に対する不信任感
看護師・患者役体験で気づいたケアに対する学びの共有	他者とは異なる気づき 果たせなかった患者役割 体験で得られた情報の提供
看護師・患者役体験を通して気づいた患者心理をふまえた援助の必要性	遠慮や気兼ねを考慮した援助 羞恥心の軽減 不安の軽減 負担の軽減 家族を含めた援助方法の提案 自尊感情を低下させない援助方法の提案 患者の立場に立った援助方法の提案 患者・看護師関係
体験学習における看護師・患者役割の見直し	看護師役割の見直し 患者役割の見直し
看護師・患者役体験で統合された知識と技術	知識と技術の統合
学習課題の気づき	学習方法の見直し 学習内容と方法の見直し
職業経験を活用した助言	介護経験をふまえた助言 介護経験の振り返り
看護師になる自分の健康管理の必要性の認識	看護師になる自分をイメージした健康観

表3 現役生グループの発言内容の特徴

カテゴリ	サブカテゴリ
看護師役体験を通して気づいた看護技術の不足	手技の難しさを実感 一連の動作への戸惑い 一連の動作の振り返りを通して技術の未熟さに気づく
看護師役体験を通して実際の患者へのケアを提供する責任の自覚	患者をより具体的にイメージしたことでのケアへの不安 コミュニケーションの重要性の再認識 対象を尊重した援助の重要性
患者役体験を通して気づいた援助を受ける患者の気兼ねや苦痛	援助を受けなければならない患者の緊張感 援助を受けなければならない患者の気兼ね 援助を受けなければならない患者の我慢 援助を受けなければならない患者が抱く不快感 援助を受けなければならない患者が抱く不安 援助を受けなければならない患者が抱く羞恥心 援助を受けなければならない患者が抱くもどかしさ 援助を受けなければならない患者が抱く自尊感情の喪失
患者役体験を通して気づいた看護師への思い	援助を受けなければならない患者の心情を理解 援助を受けなければならない患者の心情に対する変化 看護師役に対する嫌悪感 看護師役体験を終えてから患者役体験での気づき
看護師・患者役体験で気づいたケアに対する学びの共有	他者とは異なる気づき 果たせなかった患者役割 体験で得られた情報の提供
看護師・患者役体験を通して気づいた患者心理をふまえた援助の必要性	遠慮や気兼ねを考慮した援助 援助を受けなければならない患者の心情を考慮した援助内容 患者・看護師関係
体験学習における看護師・患者役割の見直し	看護師役割の見直し 患者役割の見直し
看護師・患者役体験で統合された知識と技術	知識と技術の統合
学習課題の気づき	学習態度の見直し 学習内容の見直し 学習方法の見直し

表4 社会人学生を含むグループと現役生グループの発言内容の特徴（カテゴリ対比）

現役生だけのグループにおけるカテゴリ	社会人学生グループにおけるカテゴリ
看護師役体験を通して気づいた看護技術の不足	看護師役体験を通して気づいた看護技術の不足
看護師役体験を通して実際の患者へのケアを提供する責任の自覚	看護師役体験を通して実際の患者へのケアを提供する責任の自覚
患者役体験を通して気づいた援助を受ける患者の気兼ねや苦痛	患者役体験を通して気づいた援助を受ける患者の気兼ねや苦痛
患者役体験を通して気づいた看護師への思い	患者役体験を通して気づいた看護師への思い
看護師・患者役体験で気づいたケアに対する学びの共有	看護師・患者役体験で気づいたケアに対する学びの共有
看護師・患者役体験を通して気づいた患者心理をふまえた援助の必要性	看護師・患者役体験を通して気づいた患者心理をふまえた援助の必要性
体験学習における看護師・患者役割の見直し	体験学習における看護師・患者役割の見直し
看護師・患者役体験で統合された知識と技術	看護師・患者役体験で統合された知識と技術
学習課題の気づき	学習課題の気づき 職業経験を活用した助言 看護師になる自分の健康管理の必要性の認識

